

みのおのおいたち

その7

箕面地区(三)

阿比太神社と古墳が点在する丘陵台地の東から南部に広がる平坦な地帯は、箕面川の沖積扇状地です。古い時代から集落と耕地が発達し、人びとが生活と生産を営んできた地区の中心地でもあります。



小形丸底蓋

こうした地域と、その西側の丘陵台地を分ける形で箕面川が流れています。言わば祖先の霊の鎮まる聖域と人の住んでいる世俗界との境界とも言えるでしょう。

ところで、地区の平坦地域が世俗の場に発展した時代、つまり地区の上代史を探るうえで欠



管玉 白玉 勾玉 包丁

土器片

南へ離れた所では、土師・須恵質の土器にまじって、製塩土器と呼ばれる小形の壺が二〇個ほど出土しましたが、これらは五世紀から六世紀ごろの製品です。遺跡の主要部はさらに東側へ続くことが推測できました。

この町田遺跡から東南二百メ

師・須恵質の土器が多量に出土しましたが、住居跡ともども五世紀の中後期のものと考えられます。

以上は両遺跡の調査概要ですが、遺構と遺物を通して得られた遺跡の性格は、五世紀代の住居跡、つまり「ムラ」跡であると言えます。したがって二つの遺跡を含むこの一帯は、五世紀から六世紀ごろにあつては「ムラ」地域であつたと見てよいでしょう。この住居跡からすると、五世紀前半に町田のムラが誕生し、後半になって住居区が池ノ内に移つたと見られますが、両地点一帯は変わりなくムラ地域であつたことが、遺物の出土地から推測でき、初期のムラが発達し、東南の方角へ拡張していったことを物語っています。

池ノ内遺跡からは、弥生時代中期に属する土器と石包丁、土器に付着した炭化米も見つかりました。これらの遺物は、後年に遺跡地が開墾されたとき、近くから運びこまれた土にまじっていったものと考えられ、もとの場所は不明ですが、ごく近い所に弥生時代の遺跡があることは確かです。

また、西小路地区でも箕面駅寄り、電車線路の東側で弥生時代中後期の土器が発見されました。これは箕面川の洪水時に上手から流れてきたものでしょう。それにしても、稲の穂刈り道具の石包丁と炭化米の発見によつて、箕面地区でも一、二世紀ごろから米作りの行われていたことがわかりました。

その当時の遺跡は「ムラ」跡の一つが町田と池ノ内遺跡に近い所であろうということも推測できます。したがって、五、六世紀に栄えていた「ムラ」の創設者は、その付近で米を作つていた弥生人たらの子孫であつたかもしれませぬ。

それにしても、地表から想像もできない所に上代のムラを創り、やがてそこから姿を消した先人たちの、他界後の足跡を今に伝えてくれるのが、丘陵台地に残っている古墳です。これが、これは次号へ譲ります。

かせないのが、町田遺跡と池ノ内遺跡でしょう。両遺跡とも本紙で紹介しましたが、町田遺跡は箕面本通り東側にあつた五世紀前半の住居跡です。調査地内での発見は住居跡一棟と、土師質のカメ・壺・高坏鉢にまじつて、炭化した米の種子も見つかりました。また、住居跡から

1メートルほどにあるのが池ノ内遺跡です。調査地の北西部、つまり町田遺跡寄りの所から、五世紀初頭をくだらないと推測される小形丸底壺一個と、その東側に六棟の竪穴住居跡が見つかりました。遺物の種類は豊富で、石製の勾玉・管玉・白玉とガラス玉、鉄の矢尻と刀子、土